●春日部市民文化講座（第 25 回）　「長次郎の赤茶碗と黒茶碗の意味を問う　－千利休の侘茶の真髄－」

◆日時：2018 年 3 月 7 日(水)　10 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■茶の湯を始めたきっかけ

ぼくはこの春日部の市民になって約 50 年になりますが、実はこの地に来るまで春日部という街を知らなかったのです。浦和までは高校生を教えに来ていたのですが、「春日部ってどこだよ」って感じで、ぼくの中では春日部は外れていました。それが、約 50 年前にここの牧師になってしまったのですね。そして、春日部青年会議所にぼくも望んで入ったのですけれども、会報に巻頭言を書けって言われて**「私は 2 つの K を愛しています。一つは春日部の K で、もう一つはキリストの K です」**と書いたら、みんなが受けてくれて、牧師うまいことを言うなってことがありました。これは二番煎じなのですけれどもね。そして、この**春日部の牧師になってから茶の湯を始めたのです**。なぜかと言うと、ぼくがキリスト教徒になって、ぼくの目の前にいつも映像として存在していた人がいるのですね。それが千利休の高弟の一人で、いろいろな時代の背景がなければ、ぼくはその人が千利休の一番弟子たったと思う人で、**その人の名前は高山右近です**。高山右近をキリスト者として自分の目標として学び始めたら、茶の湯が分からないと高山右近が分からないのですよ。それは、日本にある高山右近に関する資料がほとんど茶の湯に関してのものばかりだからなのです。一番最初に金澤の武家屋敷で見せていただいた高山右近の茶会の招待状は 2 行くらいの手紙なのです。**「羽箒ができたので一服差し上げたいと思います」**というものでした。羽箒というのは、鷲の羽などで作った塵を清める道具なのですが、それができたから一服いかがですかという招待状なのです。千利休は、羽箒と茶杓は自分で作ってもいいんじゃないかという規範を作っていて、自分で作ったものを人にあげたりしているのです。そういうことに出会って、何これって思ったのです。そこで、ぼくは春日部から新宿の三角ビルと呼ばれた住友ビルのカルチャーセンターに通いました。そのカルチャーの先生が、ぼくのことを「牧師は面白い」って言って、あちらこちらへ連れて行ってくれて、例えば三井八郎右衛門さんの所に連れて行ってくれて、三井本家の宝物のお道具が出されるお茶会でぼくがお点前させていただくまでに出世しちゃったんですよ。それはぼくの腕がいいからではなくて、ぼくの先生が面白い牧師を訓練させてやろうと思ったのでしょうね。そして、あちらこちらへ行かせていただき、表千家の宗匠方とも親しくさせていただいて、こんな生意気になってしまったのです。ごめんなさいね。**牧師にとっての茶の湯とは何かというと、イエス・キリストに従うための修道の一つなのです。ですから、より良いキリスト者になるために茶の湯をやっています。**という訳でよろしくお願いいたします。

■４０年間の結実

今日のテーマは「長次郎の赤茶碗と黒茶碗の意味を問う」で、その次が凄いですね。**「千利休の侘茶の真髄」**ですからね。これからぼくがお話しようとしていることは、ぼくの 40 年間の結実であり、「あぁ、茶の湯ってそうなんだ」と思えたことを、今日はお話したいと思います。高山右近というのはキリスト教徒でして、高山右近の茶の湯を考える時に、聖書にこういう言葉があるのです。**「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く。そして、そこから入って行く者が多いのです。命に至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです」**（マタイによる福音書 7 章 13～14 節）。「あっ、何これは路地と躙り口と茶室の話かい」って言うぐらいぴったりと合う言葉なのですね。

■新たな研究「高山右近の清めの病」

高山右近は戦国大名で、信長に高槻城主を任されて京の公家さんたちを守る仕事をしていました。それだけ高槻というのは重要な場所だったのですよ。そういう中で、千利休の弟子になって、ザビエルさんや宣教師たちがいっぱいやってくる中で、高山右近の茶の湯というものが出来上がっていった訳で、他の茶の湯の人たち、当時の数寄者と言われた人たちとはちょっと違ったようですね。その違いを目ざとく感じ取っているのは**織田有楽斎**という人です。織田有楽斎という人は殺された信長の弟で、千利休のお茶を学んでいた人なのですが利休七哲の中には入っていません。彼は高山右近の茶人としての茶の湯を見た時に、織田有楽斎は**「彼は清めの病に罹っている」**と言っているのですね。不思議な言葉ですよ。だから数寄者のお茶とは違っていたのです。今年からぼくはこの「高山右近の清めの病とは何だろうか」ということを自分のライフワークっとして追及したいなあと思っているのです。高山右近については、そういう言葉しか残っていないのです。キリシタン関係のことについては徳川時代に全部消されています。だからぼくたちが資料として使いたいなと思うものでも、意図的に消されているのです。如何にキリスト教徒がこの日本において嫌われていたかということです。高山右近は国外追放ですからね。そんなに宣教師のように生きたければ、勝手に行けと言われて、長崎からルソン、今のフィリピンに行って死んでいるのですね。

2018 年 3 月 7 日

第 25 回　「長次郎の赤茶碗と黒茶碗の意味を問う －千利休の侘茶の真髄－」

■侘茶の誕生

ぼくたちが「室町時代」と呼んでいるのは、北山に**鹿苑寺（金閣）**を建立した**三代将軍足利義満**が邸宅を室町に移して政治を執り始めたことから**「室町幕府」「室町時代」**と呼ばれていて、室町文化も始まります。そして、**八代将軍義政**の時代になって東山山荘に移って政治を執った半世紀の**「東山時代」**に文化の最盛期を迎えたと思います。この東山の別荘が、皆さんも良く知っている「銀閣寺」です。正式な名前は**「慈照寺銀閣」**と言いますが、その中に**「東求堂（とうぐうどう）」**という持仏堂があり、その中に**「同仁斎（どうじんさい）」**と呼ばれる四畳半の書院の間があります。茶室とは呼ばないのですが、あの部屋が三千家も共通して**「侘茶の最初」**を現わしている建物ではないかと言われているのです。足利義政（1449-1473 年）の時代というのは、幕府の中でも世襲に関するごたごたがあり、財政難、土一揆（どいっき）と言われる民衆の政治的要求活動があったり、水害や干害、地震などによる大飢饉があって、義政の奥さんの日野富子と弟の義視（よしみ）の対立が**応仁の乱**（1467-1477 年）へと続いていくのですから、将軍、政治家として足利義政は向いていなかったのかも知れません。

慈照寺銀閣

東求堂

同仁斎

■日本文化の転換期にある応仁の乱

この応仁の乱の時代は、戦乱に明け暮れる世の中になったのですが、一方で能、茶道、華道、庭園、建築、連歌など多様な芸術が花開いた時代でもありました。　茶の湯の世界で「わび」と言うと必ず**「わび・さび」**ですよねって言われることがあるのですが、何でこれが一緒にくっ付いてくるかと言うと、最初は和歌だったのですよ。**「さび（寂）」**というのは、**村田珠光（1422-1502 年）の茶は「冷え枯れる」「冷えやせる」**と言われ、「冷え枯れる」「冷えやせる」という**和歌の世界の寂しさが「さび」**なのですね。**和歌の世界の境地が、千利休によって体で表現する、五感か六感で感じる世界が現れて、「侘しさ」「侘しい」という中から「わび（侘び）」が生まれるのです**。その二つが一緒になって「わび・さび」と言われるようになるのですが、これが日本文化の特徴なのですよ。応仁の乱というのは日本文化の転換期でした。その後、戦国時代に入っていって足利家が滅びる訳です。応仁の乱から信長が世に出る前までは、文化人たちは戦乱の続く京都から逃げて奈良や堺に疎開していたのです。疎開していた文化人の中に、豪商で連歌師、茶人の**武野紹鴎**（1502-1555 年）なんかも居たのです。その武野紹鴎が堺にいたことによって、その弟子になった**千利休**（当時は宗易、抛筌斎）や**日比屋了慶**たちに茶の湯が繋がっていくのですね。

■堺の商人の侘茶

日比屋了慶という方も凄い茶人で、豪商で会合衆の一人ですが、宣教師たちと親しくして自宅を教会として開放した方でもあります。**武野紹鴎**は、足利義政が造った同仁斎の四畳半の座敷を踏襲して、そこで「侘茶」を千利休や日比屋了慶たちに教えていったのです。ここ 30 年の間で、堺市は発掘できるところを学芸員が凄い情熱をもって発掘していて、茶の湯の世界が蘇ってきているのです。応仁の乱以降も、火災とか地震とかで町が作り替えられてきたので重層になっていたのですが、発掘することで利休時代の黒茶碗がゴロゴロと出てくるのですよ。ぼくたちは**「黒茶碗」**というと長次郎の茶碗というイメージしかないのですが、最近のコンセンサスとしては長次郎の黒茶碗と似たものは、他の人も作っていたということです。最近の研究で、釉薬や土などが科学的に分析される中で、これは一人の手だけではないなということが分かってきたのですよ。

堺で発掘された黒茶碗

■新しい価値観へ数寄者の誕生

たくさんの黒茶碗が出回っていたということは、この時代に茶の湯に執心いた人たちが多かったということで、そういう人たちのことを**「数寄者」**というのですよ。「数寄者」の数寄の語源は、「好き嫌い」の「好き」です。ですから、足利時代、東山文化で作られた価値観をガラッと変えたいというエネルギーが出てきたのです。織田信長もそうですし、豊臣秀吉もそうですが、**下克上の時代というのは新しい価値観への転換期だったのです**。今まで「これがいいよねぇ」と言ってたのに対して、「いや、そうかなぁ、俺は違うけれども‥」と言える時代が来た訳です。戦国武将と

商人を中心として町人文化が広がったのが安土・桃山時代であって、江戸時代に入るとまた幕府の統制でガチっとしたものになっていくのです。

■**市中の山居、そしてわび茶の完成**

「みんながいいから良い」という時代に、「俺はそうは思わない」という人が出てきた訳で、堺に**「市中の山居（しちゅうのさんきょ）」**という世界が広がっていくのです。正式には**村田珠光**のお子さんが、そういったものを構築したという文章があるのですが、「数寄者が市中の山居を造っているよね」って。でも、この「市中の山居」という言葉は、最近まで忘れられていて分からなかった言葉なのですが、宣教師の**ロドリゲス**という人が分厚い『日本教会史』の中にローマ字で書いているのです。それはどういうことかというと、**「小さな茶の家、それは市中の山居であり、 まるで隠者の家の風を表している。茶の湯は、あらゆる人を温和にさせ身分の上下なく、 謹んで椀を主と客で楽しむ。 床の飾りに野の花の一輪、そこには自然とも一体と感じられる雰囲気があった。祈りに近い環境であると」**と書いているのです。これは、キリスト者でいえば、聖書を読んで静かに黙想する修道と似ています。それが「市中の山居」なのですね。だから、茶の湯をするということは、ただおもてなしをするということだけでなくて、本音を言うと一人で寂しいから、誰か来てくれて一緒にお菓子を食べて、お茶を飲んでくれないかぁ‥という原点があるのです。この本質は何かというと、商人が忙しく損得商売をやっていて、俺がやりたいんだからいいじゃないか、何が正しくて何が間違いかという価値観がなくなってしまっている中で、心が貧しくて乾いているからなのですね。そういう意味では、今の時代と似ているかも知れませんね。**千利休**は、そういう世の中、人たちの心に気が付いていたのですよ。そして武野紹鴎から学んだ「侘茶」を完成させていったのです。だから**彼が「侘茶の完成者」**と呼ばれている訳です。

■**数寄者たちの茶碗**

数寄者は好みですから、「ぼく、これは好き、これは嫌い」と言っても、他流の悪口などを言ってはいけないのです。それぞれの好みで分かれているだけですからね。特に、江戸時代になって数寄者が流行るのですが、それは徳川が安定政権を持つことが分かってきた時に家元制度もできたのですね。三千家も**千利休の孫・宗旦**（1578-1658 年）の子から始まる訳ですから、江戸時代に入ってです。江戸千家は、江戸中期の町人文化が大きく広がった頃に、表千家から派生的に生まれた流派ですよ。ですから、こちらも家元制度が続いています。この家元制度というのが革新的な文化人たちからすると諸悪の根源だというのですね。それが、明治になって興った大日本茶道学会ですよね。**家元制度の中身は好き嫌いの「好き」なのです。**お家元好みというと、素直なお弟子さんたちは「ははあ、左様でございますか」と言ってありがたがって購入するのですが、それは本物ではなくて写しなのですね。確かに、それはぼくが求めた高山右近の茶の湯ではない、侘茶ではないと思うのです。だから、ぼくたちは偽物でも、その作者がしっかりとした作為を示した本物を使うことが大切です。それで出会ったのが、**細川護熙さん**なのです。何かご縁があって細川さんと出会い、この茶碗に出会いました。これは長次郎に似た茶碗なのですが、彼が一番嫌いなのは「あれは長次郎の写しですね」という言葉です。周りにいる人たちは一切そういうことは言いません。それはあの方は殿さまですからね。仮に長次郎に近い黒茶碗を造ったとしても、これは俺の好み黒茶碗だということなのです。

〔細川護熙さん作の茶碗「如何ト云」を持つ高橋先生〕

■**長次郎の茶碗**

長次郎という人は茶碗作者ではなくて本当は瓦職人なのですね。ぼくは樂さんの話を聞いたり、堺で出てきた埋蔵品などを見ていて、どうも長次郎という人は堺に住んでいた瓦職人ではないかなという思いを学芸員にぶつけたことがあるのですね。そうしたら学芸員が面白いと言って研究してくれて、確かに堺で瓦が生産され、それらが四国で使われていたことなどが究明されました。そして、「高橋さんが言っていた長次郎が堺に住んでいて瓦を焼いていたということがまんざらでもないなと思っているんですよ」と言われたことがあります。ただ、長次郎と千利休が何処で出会ったかという証拠がどこにもないので証明されていないのです。こういう感じの茶碗です。これの現物は表千家にあります。銘は「禿」といい、

〔利休所持　長次郎作黒茶碗　銘「禿（かむろ）」〕表千家不審菴 HP より引用

花柳界で花魁の傍に侍っている女の子を言いますね。こういう名前は後からついてきますので、長次郎が焼いた時には黒茶碗とだけしか呼ばれていなかったと思います。

■古田織部と織田有楽斎の謎

千利休の後に**古田織部**という人が頭角を現します。この古田織部という人も謎の人です。江岑宗左が書いた**『江岑夏書（こうしんげがき）』**には利休の7人の弟子の中で古田織部は7番目に書かれていて、しかも**「七～古田織部殿、此内、織部一茶之湯能無御座候、併後ニはふへん世二勝申候」**と書いてあるのですよ。織部は、この7人のうち一番茶の湯の才能がなかったが、後に天下一宗匠となったと記しているのです。この「能無」というのは、今でいえば「阿呆」ですよ。でもこれは意味が深いのですね。最初は何だと思ったのですが、いろいろと考えてみると**織部もどうもキリシタンらしかったのです**。ですから、その死は全部消されています。でもね、消してもその片鱗が例えば、大阪の南蛮文化館にはキリシタン文様、十字架がくっきりと入った織部茶碗や瀬戸黒があるのです。そういうのは消されていないのですね。それからさっき言った**織田有楽斎もどうもキリシタンらしいのです**。織田有楽斎が隠居所として造った茶室**『如庵』**に謎の三角形の空間を残しているのです。茶室の中には鱗板というのがあって、そればかりが目立つから天井から付いている壁で見落とすくらいの空間があるのですよ。そこにキリスト教の文様のある何か、十字架であったかは分かりませんがあったというのです。そういう物っていっぱいあるんですよ後世になって。実は‥と言って出てきたものはいっぱいあるので、近々世に出てくることを期待します。

■小堀遠州の作庭

古田織部の次に**小堀遠州**（1579-1647 年）という人が出てくるのですよ。この人は戦国時代が終わって江戸時代になろうとした時の作庭奉行、建築家ですね。代表的な庭園として**「桂離宮」**があります。ここは平安時代から貴族の別荘として建てられていたので、さまざまな人の手が入っていますが、その中で小堀遠州が作庭したと言われています。ここに何回か通っているうちに、桂離宮の職員の方から**「高橋さん、この桂離宮には 7 つのキリシタン灯籠があるんです」**とご指導いただいて見させていただきました。何で桂離宮のような場所にキリシタン灯籠があって、しかも 7 つというのは聖書では不思議な意味を持っている数字なのです。聖書の一番最後には「7 つの教会」というのが出てくるのですが、ぼくの直感として「これは世の光としての7つの教会を指しているのかなぁ」と思ったりしました。ても、これも謎なのですが、そういうことの意味は全部消されています。でも宮内庁が許可して出しているパンフレットに「桂離宮にはキリシタン灯籠が 7 つ存在している」ということが記録されています。

■戦国から平和な時代へ

歴史の中からキリシタンに関することを消す理由は、民主主義的な政策が封建体制には似合わないということです。権力を持つということは、みんなにワイワイとやらせておいて最後に「こうだよね」と言って、みんなに「あぁ、そうそう」と言わせることが現代の賢い政治家なのですよ。まぁ、終わりは来ますけれどもね。政治はともかくとして、**平和な時代に家元制度が確立されて侘茶の世界は大きく変わりましたね。**どう変わったかというと、家元の好みというものが十職によって作られてきますから、おのずと好みが限定されてくる訳ですよ。ぼくは茶の湯を学びながら、それはつまらないなと思いました。織部の革命的な好みは「数寄者の好き」ですね。**「織部灯籠」**というのは、形は「キリシタン灯籠」とそっくりで、あそこに刻まれていることはいろいろと言われていますが、あの灯籠を高山右近も気に入っていたのですね。あの形は十字架が礎石無しで地面から立っている形なのですよ。それが織部灯籠で、それは意味が分からなくていわゆる侘茶の坪庭に流行っていったのですね。意味なくと言ってしまうと語弊があるかも知れませんが、皆さんがこのお茶碗を持っていれば安心だよね、というのと同じくらいにみんなが坪庭に置くものとして江戸時代に定着していきました。皆さんは**仁清**（野々村仁清、京焼色絵陶器を完成と言われている 17 世紀の人）や**小堀遠州の「きれいさび」**と言われるような作品がお好きでしょうが、そういう綺麗なものが小堀遠州の出現する江戸時代になって作られるようになってきたのです。

■最初に長次郎に焼かせたのは赤茶碗

今の茶の湯の世界では赤茶碗と黒茶碗があったとすると、お正客には黒茶碗を主と出すのですよ。でも、利休さんの頃は違ったようです。利休さんの百会記を見ていくと黒も使っているのですが、**「木守」**が 10 回以上登場するようになり赤を多く使っているのですね。千利休が長次郎に最初に焼かせた茶碗として、この本に出てくる茶碗は**「ハタノソリタル茶碗」**が出てくるのです。これは、後から**『道成寺』**という名前が付けられているのですが赤茶碗な

のです。　次に、これは縄文時代の土器です。沖縄西表島（いりおもて）のすぐ近くにある島で作られたものです。この島は、沖縄文化によって作られた神聖なる場所で一般の人が立ち入ることのできない所で発見されたものです。この茶碗の作者は、その島にお弟子さんたちと研究に行って、どうしてこの焼き物の中に貝殻が入っているのかとか、どういう温度で焼いたのかなど、その島の焼き物を研究して再現されている方です。これは**「パナリ焼」**というのですけれども、彼はこれと全く同じ茶碗を発掘したのですね。それで土器に惹かれてのめり込んだのです。ぼくは、この方と出会った時に、先ほどの「ハタノソレタル茶碗」を思い出してそのことを話したら、この茶碗を「持っていけ～」というのでいただいてきました。千利休は長次郎に、この土器に近い茶碗を焼かせたのだと思いました。何で赤なのかということも、ぼくにとってはずっと謎でしたが、これなんですよ。これを作られた方は**大嶺實清さん**（おおみね じっせい、1933 年 - ）という方です。沖縄の読谷山で窯を持っていらっしゃいます。これの次に實清さんに「ぼくに茶碗を作ってほしい」と言ったら、同じパナリの土と同じ方法で、轆轤を使わないで紐作りで作ってくれたのがこの茶碗です。使い込んだのでこんな色になりましたけれども、土器そのものです。そしてこれには「アダム」という名前が付いています。実は聖書の中で、**「アダム」というのは赤い土くれ**という意味なのですよ。だから、ぼくたちは土から作られているから最後は土に還るのです。これは聖書の死生観ですね。

■赤の茶碗

今、皆さんが茶の湯で習っている先生方のお茶碗、皆さんが好まれるお茶碗はみんな綺麗です。ですから、皆さんは「まぁ、綺麗だわね」と言うのです。だけど、ここに並んでいるような茶碗を見て「綺麗だ」と思う人はあんまりいませんよ。これも「赤茶碗」なのですが、和樂さんの茶碗です。私がお店に行って 1 時間半近く話し込んでいたら和樂さんが「実はこんなものが取れました」と言って出してこられた茶碗です。これは焼締めた赤です。**長次郎の「赤」**というのは、こういう赤なのですが焼しめていないのです。どちらかというと土器に近い、ヘブライの茶碗のような赤なのですね。このヘブライの茶碗は漆を掛けていますが‥。そして、これは**「乙御前（おとごぜ）」**です。「乙御前」は当時の美人・お多福を呼ぶ名前です。刀剣鑑定、研磨師で書家、陶芸家の**本阿弥光悦**（1558-1637 年）が作った茶碗ですね。光悦は**樂常慶**（らく じょうけい、樂吉左衛門家の 2 代当主。生年不詳-1635 年）とは家族ぐるみの付き合いをしていたのです。ですから、光悦も土も釉薬も、場合によっては窯も一緒のものがあって、利休好みの黒も焼くことができたのですね。ですから、「残っているものの中では、結構、光悦作があるんじゃない」という学者先生もおられます。本当のことはぼくたちには分かりませんがね。こうして並べてみると、今の茶の湯の世界、少なくとも三千家を学んでいる人は「いいですねぇ」と思う人はいないのではないでしょうか。もし、そういう人がいたら、その方は数寄者ですよ。しかも、相当に好きぶっている人ですね。

長次郎作「道成寺」

光悦作赤茶碗「乙御前」

光悦作黒茶碗「七里」

■茶の湯における「生と死」

今の茶の湯というのは、今日のテーマの「生と死」というような緊張感がないのですよ。千利休が「侘茶」を具現化しようとした頃は、彼の弟子たちも戦場を駆け巡っていたのです。彼らが帰って来る時には、自分の愛する者が戦場で死んでしまっているかも知れないのですよ。それが現実なのです。それを高山右近も、古田織部も戦国武将たちはみんなずっと経験しているのです。**毎日が生きるか死ぬかという緊張感の中での茶の湯だったのです**。牧師だから変なことを言うのですが、皆さんが健康診断に行ったら、精密検査を受けてくださいと言われて、精密検査の結果が「ガンです。しかももうちょっと早ければなぁ」なんて言われちゃったら、今までの精神で生活が続けられますか？　昨日のように今日も明日も生き続けられますか？　これは最高のストレスですよ。そういうストレスの中に戦国の武将たちはあったのです。**その時に彼らが求めていた心の渇き、魂の渇きは何かというと「命」ですよ**。如何に生き抜くか、

如何に今生きていることを喜ぶことができるかと言ったら、千利休にとっては「もてなし」の技しかなかったのです。**「もてなし」というのは、自分が美味しいなと思ったものを「どうぞ召し上がってください」と旬のものを素直に分かち合えることなのです**。それはハングリー、欲しい、渇きがなかったら出てこない愛ですよ。客と亭主が惹かれ合うから、そこに**「一座建立」**が成り立つ訳ですよね。それが「平和」であり、「命」なのですよ。「命」というのは、ぼくたちができる飲み食いの世界の中にある最高の芸術です。

■利休の侘茶の真髄、赤茶碗と黒茶碗

利休さんの時代というのは、生きるか死ぬか、命というものを嫌でも考えなくてはならなかった時代なのです。今日、ぼくがこのテーマで講演しようと思った理由は、縄文時代の土器、特に三内丸山遺跡とか、さまざまな所で縄文時代の土器が発掘されていて、赤い漆で塗られた土器があるのですよ。祭事の時に使われた土器らしいのですね。それから黒い漆で塗られた土器があるのですよ。利休さんは、あの時代の「死生観」をこういう形で表したのだと思うのですね。利休さんはそんなことを知らなかったとしても、日本人の文化の中に命を表現する色として赤があったよな、それは血の色。その血が酸化して黒くなる、それは真っ黒ではなくてかせた黒なのですよ。だから、**千利休は長次郎に自分の侘びの世界として、この時代でもう一度価値を取り戻そうとするならば「命」だ。そして「死ぬことの意味」もちゃんと取り戻さなければいけないという考えが、彼の「侘茶の真髄」にあって、まず赤茶碗を焼かせ、そして黒茶碗を焼かせた。**その後に茶碗がいろいろと出てきますね。ぼくが言いたかったことは、侘茶の世界の中心には「命への渇きがある」のです。「生きたい」「あの人がいなくなって寂しい」というような、悔いた寂しさと、もうこんな世界嫌だという気持ちを、この瞬間を今楽しもう、今分かち合おう、今支え合おう、それが茶の湯の、茶会の真髄でしょう。ぼくたちは侘茶の数寄者として、この瞬間を今楽しもう、今分かち合おう、今支え合おうという人になりたいし、高山右近という人はそういう人でした。高山右近は、家康に「お前なんか日本人じゃない、出ていけ！」と言われて、宣教師と一緒に国外追放となって、マニラに行って 40 日くらいで死んでしまうのですが、それでも満足だったのですね。護熙さんの先祖の忠興に「私の人生、如何」と問うたのですよ。そうしたら、護熙さんはぼくに「如何ト云」と問うてきたのです。やはり、侘茶の世界って手放すこと、おもてなしってそういうことなのですよね。旬で、自分が食べたいと思うものをお裾分けすることなのです。それが侘茶の真髄です。

■自分を愛するように、隣人を愛しなさい

今はグローバル化され、ポストモダンと言われるけれども、新しい秩序が生まれていないし、さぁこれからどうなるのだろうかという中で、ぼくにとって世の中は闇です。だからこそ、**利休さんが創案・構築してくれた日本の文化である「侘びの世界」を大切にしていきたいですね。それは、まず自分を愛すること、仲良くすることです。自分の中に平和がなかったら平和は作れません。自分の中にある嫌な奴を許してあげる、受け入れてあげる、自分との平和なのです**。聖書では、「自分を愛するように、自分の隣人を愛しなさい」というでしょう。これは茶の湯の心だと思います。自分の好き嫌い、自分の良さも悪さも分かりながら、隣人と接する。自分を愛するように、自分の隣人を愛しなさい。これが人生だよって聖書が教えているのですよ。ザビエルさんがわざわざ日本に来ましたが、彼らから見ると日本は極東なのですよ。「東の果て」という言い方を彼らはしているのですよ。すごく差別的用語なのですが。彼はいち早く来ました。彼がどういう精神で来たかというと、イエス・キリストの有名な「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の益があるでしょうか。」という言葉に従ってきたのです。ヨーロッパで最高の学問を修め、パリ大学でありとあらゆる学問を習得し、神学も習得して、そして気が付いたのですよ。「まだイエス・キリストを知らない人たちの所に、イエス・キリストの愛を届けよう」と、俺が行くんだって。それで来てくれたのです。この街で 40 年以上も伝道を続けていますが、キリスト教徒になってくれる人は少ないのです。でもね、高山右近は死んでも凄いのですよ。それは高槻城の中から発掘された墓からも分かるのです。そこにはキリスト教徒と分かる十字架が掛けられたり、信仰を表した物を身に着けた人たちが埋葬されていたのですよ。これは、人間は死んでもお終いじゃないよということなのです。高山右近は、イエス・キリストが復活されたという信仰を持っていて、墓から蘇るという望みを持って、墓に入るのは「さようなら」じゃなくて、「また会おうね」ということを示したのだと思います。ドイツ語で「さようなら」は「もう一度会おうね ＝ Auf Wiedersehen, アウフヴィーダーゼーエン」なんですね。彼はそういう信仰を持っていたのです。これはぼくの思いですが、利休さんが切腹する時に、**「また会おうね」**というような気持ちだったのではないかと思います。利休さんの首は、その後、一条戻り橋の袂にさらし首になるのですよ。あの人は犯罪人として殺されているのですよ。でもね、**「利休遺偈」の「天に抛（なげうつ ＝ 任せる）」と高山右近の日本決別の書の中にある「如何」はどこかでクロスしているような気がします**ね。

髙橋先生が茶の湯を始められたきっかけ、当時の春日部を窺い知ることができました。